

コロサイ人への手紙1章1-14節「実を結ぶ福音」

1A 忠実な兄弟たちへの挨拶 1-8

1B コロサイにいる聖徒たち 1-2

2B 神への感謝 3-8

1C 信仰と愛 3-4

2C 天に蓄えられた希望 5-6

3C 同労のしもべエパfras 7-8

2A 祈り 9-14

1B 神のみこころ 9

2B 主にふさわしい歩み 10-11

3B 聖徒の相続 12-14

本文

コロサイ人への手紙を開いてください。私たちは、先週までピリピ人への手紙を読み、その前はエペソ人への手紙を見てきました。これらはすべて、同じところ、ローマで鎖につながれている中で書いている手紙です。エペソ人への手紙と、コロサイ人への手紙は、中身がとても似ています。エペソ人への手紙は、キリストにあって私たちがいかに霊的に祝福されているのかを伝えていました。非常に豊かな町エペソにいる信者たちに、その忠実な姿について神に感謝するとともに、鎖につながれている苦しみにあっても、それはそのまま栄光なのだということを伝えました。そして、教会がキリストのからだであり、キリストが満ちているところであることを教えました。

コロサイ人への手紙は、内容はエペソ人への手紙と同じであるものの、その強調点が違います。キリストがすべての上におられる方であり、第一の方であり、すべての知識と知恵はキリストのうちに隠されている。そして、キリストのよみがえりこそが、まことの力であることを教えています。教会はキリストのからだですが、キリストご自身がかしらであることを強調しています。教会は、かしらであるキリストに結びつかなければ、元も子もないことを教えています。足が、脳からの指令に運動神経によって従っているからこそ機能しています。キリストにつながっているからこそ、私たちは機能するのです。ところが、キリスト以外のところでつながろうとする動きが、教会の中に起こりました。それで、パウロはこの手紙を書いています。

コロサイの町にあった霊的な状況が背景は、いろいろな哲学や、神秘主義や律法主義がありました。人間中心のギリシア哲学があります。いろいろな霊につながる神秘主義があります。また、ユダヤ教の律法を濫用している律法主義もあります。また、天使礼拝もありました。食べるな、飲むなという禁欲主義もあります。まとめるとギリシアのグノーシス主義と、ユダヤ主義の混淆のよう

なものだったのでしょう。このような教えがキリスト教会にも入り込んでいて、「コロサイの異端」とも呼ばれるほどです。要は、キリストだけでは十分ではないとしているのです。パウロは、そうした偽りに対して十分な識別力を持ち、霊的に成長し、成熟するように願っています。

これは、今の教会においても、切実な問題です。キリストの福音は、とても単純明快ですが、しかし、それは私たちの生活のすべてに及ぶ、奥深いものです。キリストにあって生きることは、仕事の職場においても十分にその創造的な力を与えます。家庭において豊かさを与えます。学問においても、スポーツにおいても、政治や経済においても、そこに知恵と知識を与えます。キリストは、すべての中のすべてであられます。ところが、何かキリストだけでは物足りないかのように矮小化して、他のものに必死になって取り組ませようする動きが、教会の世界で起こります。キリスト教にかこつけるのですが、実は無関係です。こうして、かしらなるキリストではない、違うものにつながろうとさせるのです。

コリントの町においては、午前礼拝でお話したように、町全体が、かつては貿易で栄えていたけれども、近くのラオディキアにその繁栄が移ってからは衰退する一方であり、それに加えて地震が起こりました。人々に漠然とした不安と恐れがあつて、それが、もろもろの霊に仕えようとする神秘主義がはびこり、またいろいろな規則や儀式を行わなければいけないとする、律法主義にはまっていたのです。強迫観念のように、「これこれを行ってなければ罰があたる」というように行動に駆られているのです。

なんか、日本と似ていますね。世界で経済第二位の大国だったけれども、どんどん衰退していると言われていました。そこに地震が起こったり、コロナ禍など、人々の自信が失われています。漠然とした不安にあります。そこに、これをしなければいけない、あれをしなければいけないという焦燥感を利用した教えが入り込みます。そこでパウロは、御子こそがすべての始まりだと教えます。この方の支配から漏れているものは何一つないのだと教えます。そして、あなたはキリストの死とよみがえりに結ばれていることによって、圧倒的な勝利者なのだ、この福音にこそ力があることを、この手紙で教えています。

1A 忠実な兄弟たちへの挨拶 1-8

1B コロサイにいる聖徒たち 1-2

¹神のみこころによるキリスト・イエスの使徒パウロと、兄弟テモテから、²コロサイにいる聖徒たち、キリストにある忠実な兄弟たちへ。私たちの父なる神から、恵みと平安があなたがたにありますように。

パウロは、自分のことを「神のみこころによるキリスト・イエスの使徒」と呼んでいます。この手紙が、パウロという人間から出たものではなく、キリスト・イエスの使者として、神ご自身のみこころか

ら出たものであり、権威あるものであることを示しています。そして、「兄弟テモテ」であります、パウロは独りでこの手紙を出しているのではなく、キリストにあって同じ思いになっているテモテも手紙の送り手になっています。使徒の権威が与えられているパウロ自身が、福音の働きは自分の独り芝居ではなく、チームで行っているのだということを示しています。

そして、「コロサイにいる聖徒たち」と言っています。コロサイは、アジアにあるエペソから内陸に約 300 キロメートル東にあります。トルコには、メンデレス川という大きな川があり、その支流であるリュコス川があります。その流域に、ラオディキア、ヒエラポリス、そしてコロサイがあります。パウロは、この手紙に、ラオディキアとヒエラポリスにある教会にもこの手紙が読まれてほしい旨を書いています。そこは、正確にはアジアではなく、フリュギアという地方の南西の端に当たります。

コロサイという町に住んでいながら、しかし、この人たちが「聖徒たち」と呼ばれていますね。聖め別たれた者、という意味です。この世から別たれて、神のものにされているということです。この人たちが明確に、イエスが自分の主であると告白し、イエス・キリストにつくバプテスマを受けていることを示しています。ちょうどこれは、みなさんが東京や、埼玉、千葉などの町に住んでいながら、バプテスマを受け、しっかりと信仰を表明し、キリストについているところに表れています。

さらに、「キリストにある忠実な兄弟たち」と言っていますね。忠実という言葉は、自分の信仰の大きさや強さを示していません。フィラデルフィアにある教会に対して、イエス様が、「あなたには少しばかりの力があって、わたしのことばを守り、わたしの名を否まなかった。」と言われました(黙3:8)。少しばかりの力であっても、それに対して怠慢にならず、イエスを信じていることを意味しています。これは、みなさんも受け取るべき、励ましの言葉です。ご自身に足りなさを感じているかもしれませぬ。けれども、自分に与えられた力で、主を信じ、主に仕えておられますね。キリストを信じるということが、日本社会にあって、人間的には生きづらさを感じさせるのですが、それでもこの方に頼って生きています。神の恵みによってそうできているのであり、キリストにある忠実さです。

そして、挨拶の言葉、「恵みと平安」があります。神の恵みは、それを理解する時に大きな力を持ちます。人を全て変えて、実を結ばせます。その実の一つが、平安です。平安とは単に心が穏やかということではなく、すべてが整理されている状態、全き姿です。神の恵みがあって、それで平安があります。

2B 神への感謝 3-8

1C 信仰と愛 3-4

³私たちは、あなたがたのことを祈るときにいつも、私たちの主イエス・キリストの父なる神に感謝しています。⁴ キリスト・イエスに対するあなたがたの信仰と、すべての聖徒に対してあなたがたが抱いている愛について聞いたからです。

「聞いたからです」と言っているところから分かるように、パウロはコロサイの教会には行ったことがありません。けれども、コロサイの教会はおそらく、エペソにおけるパウロの働きの結果、生まれ出たものと思います。彼が毎日、ティラノの講堂で論じたのですが、「これが二年続いたので、アジアに住む人々はみな、ユダヤ人もギリシア人も主のことばを聞いた。(使徒 19:9)」とあります。コロサイから来ていた人々が福音を聞き、それをコロサイにまで持って行って、福音を伝えたのでしよう。そして、エパfrasという働き人が7節に出てきますが、彼が教会開拓をしたのだと思われま。そしてエパfrasが、わざわざコロサイからローマにまで来て、今のコロサイの状況を牢に入っているパウロに伝えた、ということです。

パウロは、まだ行ったことのない教会の人々のことで祈り、「いつも」神に感謝していました。私たちは、これを御霊によってすることができます。私たちのことを、この教会のことを、アメリカのカルバリーチャペルの人たちが祈ってくれています。そのほとんどが、一度もここを訪れたことがありません。それでも、いつも祈っている人々がいます。私たちも、自分に関する人々のことだけでなく、まだ会ったことのない人のためにも祈るべきですね。それは、「これは、主がなされていることだ」と、はっきり分かる時に祈ることができます。実が結ばれているの見聞きする時に、祈らざるを得ないのです。そのようにして、多くの働きは前進しました。福音宣教にしても、迫害下にある教会にしてもそうです。

パウロは、そうした実として、彼らのイエス・キリストに対する信仰と、彼らの他の聖徒たちに対する愛を取り上げています。みなさんは、イエス様を信じていますか？そうですね、信じていますね。これはすばらしい証しであり、実です。そして、その信仰が生きていれば、自ずと、すべての聖徒に対する愛があります。つまり、教会やキリスト者の仲間を大事にする思いが与えられます。もし、それがなければ、ヨハネ第一によりますと、そもそも神の愛が留まっていない、神によって生まれていないと言えます。他の兄弟と姉妹のことを気にしていますか？祈っていますか？愛していますか？それは、イエス・キリストに対する信仰と共に与えられた実です。

2C 天に蓄えられた希望 5-6

⁵ それらは、あなたがたのために天に蓄えられている望みに基づくもので、あなたがたはこの望みのことを、あなたがたに届いた福音の真理のことばによって聞きました。

「天に蓄えられている望み」というのを、使徒ペテロも第一の手紙でこう言っています。「I ペテ 1:3b-4 神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせ、生ける望みを持たせてくださいました。また、朽ちることも、汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これらは、あなたがたのために天に蓄えられています。」そして、その天から主イエスが戻って来られて、私たちはその資産を神の国を受け継ぐ者とするのです。

パウロや他の使徒たちの手紙には、キリスト者にとって三つの大切な要素があることを教えていますね。信仰と愛、そして希望です。第一コリント 13 章の最後の言葉が有名ですが、その他にも、いろいろな箇所で、信仰と希望と愛がいっしょになって語られています。これが福音の真理のことばの中にあるんですね。イエス・キリストにある信仰、そしてそこにある愛。それから、主が再び戻って来られる希望です。これらは切っても、切り離せないものです。

⁶ この福音は、あなたがたが神の恵みを聞いて本当に理解したとき以来、世界中で起こっているように、あなたがたの間でも実を結び成長しています。

福音にある力が述べられています。福音には、神の恵みが示されています。神の恵みを本当に理解すれば、人は変わります。チャック・スミスは、「恵みはなぜすべてを変えるのか？」という本を書きました。神の恵みというのは、私たちに神が良くしてくださるのが、私たちの側に全く原因がないことを示しています。神が憐れみ深い方だから、そういったご性質の方だから、私たちがただ愛しておられるのです。

私たち人間は、どこかで必ず、自分が何かをしないと、何かしてもらえないという思いがあります。だから、どうしても何か良いことが起これば、自分がこういうことをしたからそうなのだと思って、悪いことが起こると自分がこんなことをしているからこんなことが起こったのだ、とします。しかし、神の恵みは、私たちが悪い者であるにも関わらず、祝福をくださるのです。これは不公平だ！となじるのであれば、では、すべての人が神の正しい裁きの中で滅びるのが当然なのです。私たちの義は、神の前では不潔な着物のようですから。神は、私たちには何も良いものがないことを知っておられて、一方的に腸がふるえるような憐れみを抱かれて、それで信じる者を救うという良いことをしてくださっています。この恵みを知ったら、人は変わってしまいます。

そして、その恵みによって、コロサイの人々の間に実が結ばれているので、パウロは神に感謝しているのです。パウロは、とても大きな視野から、彼らの実を眺めています。「世界中で起こっているように」というところです。エルサレムのユダヤ人たちの間で、聖霊が降って始まった福音宣教が、今や、ローマ帝国の都、ローマにまで届いています。ローマ帝国は地中海沿岸地域のすべてを網羅する、大帝国となっていました。その至るところに、福音が届いています。その中に、コロサイの人たちにも実が結ばれ、成長するのです。

私たちは、このような視野が大切です。自分の信じたことは、実は全世界で神が働いておられることの一部なのだという視野です。パウロの手紙を見ると、「すべての聖徒」という言葉も多いです。私たちの信仰が、個々人の私的なものでなく、教会という公のものであるし、また、世界の教会のものでもあるのです。今は、テクノロジーの時代、ユーチューブ動画で、あらゆる国々の、あらゆる言語の賛美を見ることができます。バプテスマも見ることができます！真っ青な海でバプテスマ

マを受けている、南国の島のバプテスマもあれば、湖の氷を割って、その中にドボンと入れる、ものすごいバプテスマ式の姿も、北欧やロシアの国から発信されています。世界の人々が神の恵みによって変えられている中で、私たち日本の、首都圏に住む者たちも変えられています。

3C 同労のしもべエパfras 7-8

⁷ そういうものとして、あなたがたは私たちの同労のしもべ、愛するエパfrasから福音を学びました。彼は、あなたがたのためにキリストに忠実に仕える者であり、⁸ 御霊によるあなたがたの愛を、私たちに知らせてくれた人です。

先ほど話しましたように、エパfrasが福音を自分の故郷、コロサイに携えて、そこで教会が建てられたと考えられます。パウロが彼を「同労のしもべ」と呼んでいますね。ちょっと複雑なのですが、エパfrasがローマにまで来て、コロサイの教会のことを伝えています。パウロのこのコロサイ人への手紙は、エパfrasではなく、「ティキコ」という同労者が携えていくことを、4章で語っています(7-8節)。エペソ人への手紙も、ティキコに託しています。なぜエパfrasではないか？という、これがピレモンへの手紙に書かれていることです。「キリスト・イエスにあって私とともに囚人となっているエパfrasが、あなたによろしくと言っています。(23節)」

そして大事なのが、「キリストに忠実に仕える者」ということです。忠実という言葉が再び出てきました。先ほどは、「キリストにある忠実な兄弟たちへ」とありましたが、彼らの特徴は、この忠実さだったのでしょうか。キリスト者に必要な特質です。何をどれだけしたのかという量的なものではなく、たとえわずかなことであっても、信じているということ。また愛しているということ。また希望を抱いている、ということです。

アメリカ人の兄弟たちから、日本で長いこと主に仕えている者たちを見て、同じアメリカ人であっても、日本人であっても「忠実な人たちだ」と言います。それほど大きな成果を上げることができない日本の地で、10年、20年、ずっと主に仕えています。目に見えるものがわずかであっても、それでも仕えている中で、必ず主は実を結ばせてくださいます。主は真実な方だからです。英語ですと、忠実も真実も faithful という同じ言葉なのですが、主は真実な方であり、私たちがこの方に真実を尽くしたら、必ず主は実を結ばせてくださいます。

日本でカルバリーチャペルの働きが始まったのは、1990年代からありますが、本格的には21世紀に入ってからです。それまでは、短期宣教でアメリカのカルバリーチャペルから人々がやってきましたが、教会開拓は21世紀に入ってからです。沖縄ではリック・バーネットさんが、東京では、ハワイからのトラビスさんやリッチさんです。鎌倉ではジャック・ベルさんがいますね。そして日本人では、山東さんがいて、知主夫さんがいて、私がいて、浜松では安間さんが、沖縄では大城勝さんがいました。初めは本当に小さな働きでした、それぞれが。今、蓋を開けば、23の教会が

建てられています！それぞれが、何か目標や戦略をもって、20の教会を2020年までに建てる！なんていうことは、一切しませんでした。それぞれが、御霊に頼って、信仰によって始めたのです。そして、互いに会う時は、ただ愛の交わりを楽しんでいただけです。その親しい交わりがただあって、そこに自然に人々が集まって来て、ある人が示されて、新たな開拓をしていくということでした。

「忠実」というのは、しもべの姿を取ることです。主が言われることを行うことに徹します。その結果については、主がすべて行われます。私たちに命じられているというのは、信じて、愛して、そして望みを抱くことです。これだけなのです。そこに、実が結ばれます。

2A 祈り 9-14

このように、神にいつも感謝していることがありました。パウロは次に、彼らのために祈ります。その祈りは、一言でいえば、霊的な成長です。1章28節で、「すべての人を、キリストにあって成熟した者として絶たせるためです。」とあります。私たちは、ありのままの姿で神に受け入れられ、愛されています。しかしだからこそ、恵みによって成長することが期待されています。ありのままに受け入れられたからこそ、その愛によって変えられるのです。

1B 神のみこころ 9

⁹ こういうわけで、私たちもそのことを聞いた日から、絶えずあなたがたのために祈り求めています。どうか、あなたがたが、あらゆる霊的な知恵と理解力によって、神のみこころについての知識に満たされますように。

パウロは、エパfrasからコロサイの状況を聞いてから、絶えず祈り求めていることがありました。その一つ目は、「霊的な知恵と理解力によって、神のみこころについての知識に満たされ」ということです。福音の真理を彼らは聞き、信じました。しかし、いろんな生活の場面があります。また、いろんな教えが教会に入り込んでいます。それらを福音の真理に照らして、いったいどうなのか、識別する知恵と理解力が必要だということです。神のみこころについての知識に満たされるように、と祈っています。ピリピ人に対しても、パウロは同じ祈りを献げましたね。「1:9 あなたがたの愛が、知識とあらゆる識別力によって、いよいよ豊かになり…」です。

私たちは、福音の真理を知っているつもりでも、キリストだけで十分、この方が全てなのだということが、生活では実際に活かされていないことが多いです。これはこれ、あれはあれ、として、信仰のことと、そうでないものをすみ分けていることが多いです。だから、霊的な成長が必要です。それは、こういう場合には神のみこころは何であるのか？ということを見極める力です。そして、生活の全ての領域において、確かに福音の真理の中で生きている、というのが霊的な成長であります。

2B 主にふさわしい歩み 10-11

¹⁰ また、主にふさわしく歩み、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる良いわざのうちに実を結び、神を知ることに成長しますように。

二つ目の霊的成長の祈りは、「歩み」についてです。これは、エペソ人への手紙でじっくり学びましたが、パウロは、主がキリストにあってなされたこと、その霊的祝福を 1 章から 3 章に渡って書いていました。そして、その召しにふさわしく歩みなさいという勧めを、4 章以降で行っています。コロサイ書も同じで、1 章と 2 章で、キリストについての知識を書き、また偽りの教えについて警鐘を鳴らし、そして 3 章から歩みについて書いています。淫らな行いや、貪欲に対する警告があります。また柔和さや謙遜を身に着けることが書かれていおます。そして、感謝や賛美を献げることについて、書いていますし、そして家族関係と社会的関係についても、エペソ書と同じように書いています。夫婦関係、親子関係、そして奴隷と主人の関係です。神の恵みを知った人々が、良いわざの中で実を結んでいきます。

そして興味深いのは、そのように実を結んだら「神を知る」ことができるということです。ここが、私たちがしばしば間違うことです。神を知ることが、何か知的に知ることだと思っています。そうではなく、主にふさわしく歩み、主に喜ばれ、良いわざのうちに実を結ぶ中で、神を知ることができるのです。ですから、神を知ること、それは命じられたことを実行していく中で知っていくのだということです。聖書の学びは尊いことは大前提ですが、そこで語られていることを実体験してください。そのことで主を知ること成長していきます。

¹¹ 神の栄光の支配により、あらゆる力をもって強くされ、どんなことにも忍耐し、寛容でいられますように。

主にある歩みの中で、忍耐と寛容が試されます。良いわざを行っているのに、それを受けている人々は期待するように応答しません。むしろ無視したり、反発することのほうがずっと多いです。ですから、忍耐と寛容を十分に働かせる必要があります。

そこで、その時に必要なのが「強くされ」ることです。心が折れてしまう、という言葉がありますが、そうならないように、私たちは励ましがが必要です。建て上げが必要です。では、どうすれば強くなれるのでしょうか？ 私たちは安易に、「君なら大丈夫だ」とその人の内にある力を発揮すればよいのだとするのが励ましだと思ってしまうかもしれませんが、決してそうではありません。「神の栄光の支配により」とあります。神の栄光がその人を支配する時に、その人は強められるのです。

神の栄光というのは、神の恵みが働く時であり、また天にある栄光を見る時でもあります。エペソ書でも、パウロは同じ祈りを献げました。「エペ 3:16 どうか御父が、その栄光の豊かさにしたが

って、内なる人に働く御霊により、力をもってあなたがたを強めてくださいますように。」ある人が、気が落ち込んでいて、礼拝に臨みました。賛美をし、みことばが語られました。また他の人々に祈ってもらいました。そうしたら、その問題について解決が与えられたわけではないのに、強められて、その難局を乗り切る力が与えられた、というのがそれですね。

3B 聖徒の相続 12-14

¹² また、光の中にある、聖徒の相続分にあずかる資格をあなたがたに与えてくださった御父に、喜びをもって感謝をささげることができますように。

霊的成長のための祈りの三つ目は、「聖徒の相続分にあずかる資格」であります。私たちが忍耐し、寛容を尽くす中で、主が結ばせてくださる良い実があり、その行きつくところは、神の国の相続です。この世にあって聖め別たれた者たち、つまり私たち信者が、バプテスマを受けた者たちが、信仰と愛、天の希望に支えられて、実を結ばせていくことによって、その報いを神の御国で受けることとなります。その相続というのが、「光の中にある」というのが特徴的です。サタンの支配にあるところが闇です。しかし、神が光の中に私たちを招き入れてくださいました。最終的に、光に満たされる天のエルサレムに入ります。その光とは、正しさであり、聖さであり、神の栄光であります。

その御国の中に喜びをもって感謝を献げることができるように、という祈りですが、私たちは、将来の御国を思って、喜んでいるでしょうか？感謝しているでしょうか？私たちの教会では、礼拝の賛美で、ほとんど必ず、主が戻って来られること、御国が来ることを歌っています。そして聖餐式では、主が来られるまで、主の死を宣べ伝えることをもって、アーメンと言います。地上のことのすべては、神の国の入る備えのようなものです。この地上で、主にあって行っていることが、そのまま御国において報いとして与えられます。

¹³ 御父は、私たちを暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。

¹⁴ この御子にあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。

午前礼拝で、ここの部分について詳しくお話しましたので、ぜひ後で聞いてください。私たちは、罪と死に支配された暗闇の国にいました。そこで死の恐怖の奴隷となっていました。しかし、神がその力、勢力から救い出し、愛する御子の支配の中に入れてくださいました。これが、同時に光の支配でもあります。恐れから、愛への移動です。これは、イスラエルの民が奴隷の中で苦しみ、恐れていたところから救い出され、別れた紅海を渡り、エジプト軍が海の中で滅んだのを見ているのと似ています。そして、愛する神の支配の中に移されました。

私たちの生きている世界には霊の戦いがあり、サタンの国に人々は支配されているところから、キリストが神のものに人々を奪い帰しているという激しい戦いが繰り広げられています。そして、そ

の戦いは、キリストご自身が血潮を流され、それを対価として、罪と死に売られている者たちを買い取っていることで行われています。罪の赦し、これまでの罪の負債が帳消しにされることです。

そして、御子が圧倒的に、これらの暗闇の力に勝利しているということを知る必要があります。コロサイの人たちは、こういったことにも怯えていました。そして怯えさせる教えが、教会の中にもはびこっていたことでしょう。しかし、そうではないのだよ、愛する御子の支配にあなたがたはずでいるのだよ、ということです。私たちは、恐れから解放されているでしょうか？キリストにあって、大丈夫なのです。